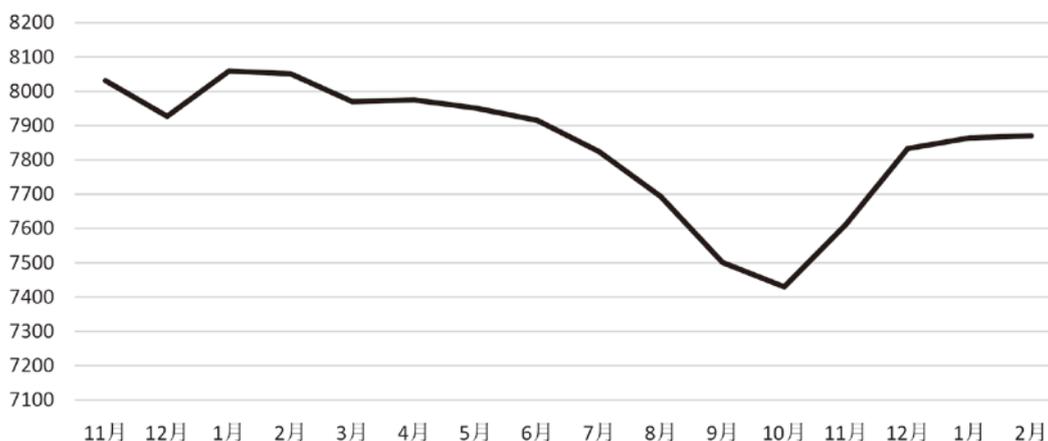


多文化共生社会における子どもたち

奥村 玲子

2020年は誰もが新型コロナウイルスに翻弄された年であった（2021年になっても現在進行形であるのだが・・・）。その1～10月、東広島市では外国人人口が連続して減少していた。ところが11月～2021年2月は増加に転じている（グラフ）。『にほんごわいわい』でも、この3ヶ月に新規入国による新人が8人いた（技能実習生、留学生、ワーキングホリデー）。政府の入国規制緩和措置（2020年10月～2021年1月）を「待ってました！」と言わんばかりのこの動きは、東広島市において、外国人が不可欠な存在になっていることをあらためて浮き彫りにした。

東広島市の外国人人口の推移（2019年11月～2021年2月）

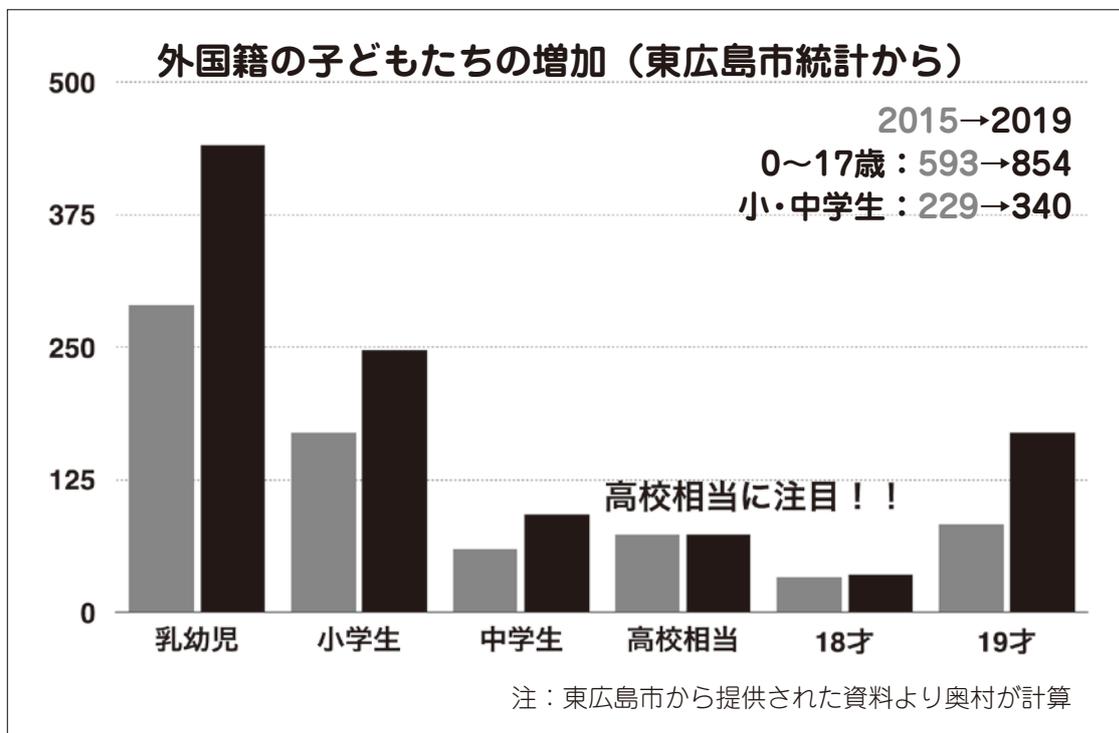


加えて子どもの教室の参加者は、少なくとも11人（兄弟姉妹を含めて）を数えた。規制緩和時に、家族の入国が多かったのではないかと推察される。

その中にアジアのある国から来たM君がいる。東広島市で就労中の両親が、ようやく呼び寄せることができたのだ。彼は16才、高校で勉強したいという。年齢的に日本の中学には入れないので、私が副代表を務める「こどものひろばヤッチャル」（以下、ヤッチャル）が支援することにした。ただし日本語学習は始めたばかり、母国での教科学習もスローペースとなれば、前途多難は覚悟の上である。

M君のような子はほかにもいる。2019年秋に16才で来日したK君である。高校入試を目指すため、学年を落としての中学転入を希望したが、それはかなわなかった。それでも彼は諦めず、1年間ヤッチャルで勉強し、2021年3月定時制高校に合格した。公立高校入試では、日本の中学を卒業していないことから、外国人特別措置が適用されなかった。幸い受験する高校の配慮で、ルビうちの問題用紙だけは認められた。彼は一言も不満は言わなかったが、適用外を知らされたときの『なぜほだけ？』という表情を私は忘れることはできない。日本社会における『高卒』の意味は誰もが認めるところだろう。彼らにとってもそれは同じである。それなのに、どうして入試の外国人特別措置に『日本の中学』という限定条件が付くのだろうか。特別措置を必要としているのは、むしろM君、K君のような学齢超過来日で高校希望の若者たちの方である。

ここで、東広島市の外国人の子どもたちの状況を見てみよう。



2015年から2019年にかけて乳幼児、小学生の増加は顕著であり、教員増員などの対策が必要なのは明白である。一方、高校相当年齢（15～17才）のこどもが、中学生と同じくらいいるというのは知られていない。この74人（2019）のうち高校に在学しているのは何人いるのだろうか。ヤッチャルでは当時20人位しか把握できていなかった。

74人の中には、M君、K君のような学齢超過來日の子も少なからずいるはずである。ヤッチャルでは12年間（2010～21）に30人と関わっているが、日本の中学を経ずに高校へ進学したのは4人だけである。それ以外は知る限りアルバイトをしている。一時的な現金収入はあるが、将来設計となると心細い限りである。

本当に、高校に行っていない子はどこで何をしているのだろうか。

外国につながる子どもたち（中学在学者、学齢超過來日問わず）の日本語力は、高校入試には不十分であることが多い。しかし『能力』が劣るわけではない。子どもの可能性を信じ、高校で適切に指導し、自立へと導ければ、それは本人のみならず、結果的に地域社会にとってもありがたいことではないだろうか。

これをまさに体現しているのがT君だ。ベトナムから中3で来日、本人の意志ではない。それでも新しい家族との生活を、彼は黙って受け入れた。当時日本語力はゼロだったが、エンジニア希望とあって数学の力はすばらしかった。中学に通い、放課後はヤッチャルで一緒に勉強した。入試時点での日本語力はまだまだだったが、幸い定時制高校に合格することができた。定時制高校は彼に

とって不本意な進学先だったかもしれない。それでも少人数であるがゆえにきめ細かい指導が得られ、数学、スポーツで存分にその能力を発揮することができた。それが彼の日本語力向上につながり、技術系の専門学校への道が開けた。

T君は専門学校卒業後エンジニアとして日本企業に就職。さらに東広島市教育文化振興事業団地域日本語教室『にほんごわいわい』で知り合った同国人と結婚し、東広島市内に家を買ひ、こどもが生まれた。来日の経緯を知る私は正直言って、彼が早くに家庭をもったことには複雑な思いもある。

東広島市は、彼が居住の場として選んでくれたことを感謝しなければならないだろう。地に足をつけて生活する若者（日本人外国人を問わず）が増える！地域にとってこんなありがたいことはない。加えてこれはあくまで副次的なことだが、彼と彼の家族のベトナム語によって救われた市民がどれほどいることだろう！

もちろん高校へ行くことだけが、外国につながる子どもたちの目指す方向性ではないことはわかっている。それでもヤッチャルは、しょっちゅう「彼らを高校に入れてくれ！」と叫んでいる。選択肢は多ければ多いほどありがたい。道を開けば、子どもたちは自分で選ぶだろう。

もちろん、どの高校でもT君にしたような対応ができるわけではない。日本語教師すらほとんどいない現状では、高校現場は「受け入れ環境を整えてからにしてくれ」と言いたいことだろう。それでも2023年度からは、高校で日本語が正式の単位として認められるそうだ。高校の体制整備は多文化共生の緊急課題である。

東広島市（≡地域社会）が外国人を迎え入れ、多文化共生への歩みを続ける時、最も困難な課題のひとつが『外国につながる子どもたち』への支援である。私は支援という言葉は好きではない。子どもたちには「先生、余計なお世話だよ！！」と言われてしまいそうだ。それでも子どもが多言語環境で育つ時、自己実現の道を歩むためには、何らかのサポート、それも専門的なサポートは不可欠である。だからヤッチャルは、しつこく子どもたちとのお付き合いを続けている！！

しかし、子どもたちに「将来、多文化共生の担い手になってね」とは言わない。それはおとなの押しつけだろう。子どもたちが自分らしく生きられる社会をつくるのは、大人の仕事である。その過程でT君のように、東広島市を生活の場として選んでくれたら、結果的に強力な担い手となってくれることだろう。

私たちが願うのは、あくまで子どもたちの自立、自己実現である。そのためにサポートできることは何か、ヤッチャルの試行錯誤は現在進行形である。

奥村 玲子（おくむら れいこ）：

1995年から多言語環境に育つ子どもたちと関わり始める。2010年からは地域日本語教室にも活動の場を広げる。外国につながる子ども対象の教室「こどものひろばヤッチャル」副代表（2010年～）。ヤッチャルの基本理念は「1人1人に寄り添うこと&安心できる居場所」。東広島市教育文化振興事業団地域日本語教室『にほんごわいわい』コーディネーター（2013年～）、多文化共生マネージャー（2016～）、東広島市第3次国際化推進プラン審議委員（2019～20）。

*奥村玲子さんには、2020年11月に行った広島県東広島市のフィールドワークにて、日本語教室視察や講義のアレンジなど、多大なご協力を賜りました。